

本が大切だった時代

東京日産自動車販売株式会社 代表取締役社長

林 文子



私の本の記憶は5歳から始まる。母は当時、天麩羅の惣菜屋をやっていた。世田谷の国道246号線の道端にその小さな店はある、幼稚園からお腹をすかせて帰る私に母は毎日、にんじんのてんぷらを食べさせた。たまに熱を出して家でひとりで寝かされてると母の友達の娘さんが看病しに来てくれ、私の布団に入って一緒に寝ながら絵本を読み聞かせてくれた。娘さんの叔父さんが講談社に勤めていて、絵本を時々貰っていた。今でもその娘さんの優しい声が耳に残っている。

小学校に入って熱中したのが、昭和27年から29年まで続いたカバヤ文庫だ。一箱10円のカバヤキャラメルを買うと、券が入っていて50点集めると一冊本が貰える。「白雪姫」や「レ・ミゼラブル」。世界文学を子供向けに翻訳してあり、話が面白くて夢中になった。クラスの子供たちと、集めた本の数を自慢しあった。

母は惣菜屋を店じまいした後は会社勤めを続け、一人っ子の私は学校から帰っても家には誰もいない。担任の女の先生が不憫がり、学校帰りによくお蕎麦を食べさせてくれ、そして本も貸してくれた。中学から高校にかけて、明治、大正、昭和の文学作品に親しんだのも先生に良い影響を受けたおかげと感謝している。

高校を卒業し、就職してお金の自由がきくようになると、本にずいぶん小遣いをつぎ込んだ。日本橋室町のオフィス街にある本屋さんが毎月の予約本を職場に届けてくれる。若い男の店員さんが両手一杯本を抱えて事務所にやってくる。私は順次届く太宰治全集が楽しみでならない。回を重ねるごとに店員さんとは仲良くなり、後に私が転職した際には、饞別にヴェートーベンの第9のレコードをプレゼントしてもらった。昔はこうしたちょっとした出会いにも心のふれあいがほどよくあって、幸せだったと思う。

私が育った時代は今より本が大切にされていた。本を介してさまざまな人との出会いが生まれた。そして会話が生まれた。インターネット上でのコミュニケーションではなく、人がじかに顔を合わせたコミュニケーションだ。今はネットの口コミでベストセラーが生まれる時代。書評は様々な人によって自由になされ、参考にもなるだろう。しかし何故か味気ない。かつて友達と、会社の先輩と本を手にしながらか読後感を語り合った日々が温かく思い出されてならない。装丁の美しさも話題だった。そういえば、友達の誕生日にはよく本を贈っていたし、また贈られたものだ。

今、活字媒体の苦境が言われているが紙媒体の本による読書の大切さを失くしてはならないと思う。なぜなら本の歴史、文化は作者の読者に対する情熱と愛情によって築かれたものだからだ。パソコンや携帯の画面では作者の思いや息遣いを感じることはできない。また一冊の本を手に取り眺め、そして読むという行為は読者の作者に対するコミュニケーションであり、作者と読者の幸福な関係を互いに享受することであるからだ。